

三陸の高校生、インドネシアをゆく ～故郷の「復興」を探る旅～



目次

・はじめに	2
・プロジェクト概要	3
・研修全日程／研修の軌跡	4

第一部 研修報告

1. 事前研修	5
2. インドネシア渡航研修	7
出発	
バンダ・アチェ	
ムラボ	
スカブミ	
帰国	
3. 事後研修	28

第二部 研修の成果

1. 研修生の成長の軌跡	31
2. 復興とは？	49
3. 同行スタッフ手記	51
4. 研修生の皆さんへ	53

はじめに

2011年3月11日、東日本を襲った未曾有の大震災は、被災地域に住む子ども達の生活にも多大な影響を与えました。震災直後は多くの学校が被災者の避難所として使用されたため授業が行えない状況となり、勉強に大きな遅れが出ました。また教室が被災して使えなくなり、体育館や他の施設を間借りして授業を行わなければならない状況も生じました。

震災から時間が経過した今も尚、多くの子ども達が仮設校舎での学校生活を余儀なくされています。仮設住宅で暮らす子ども達にとっては、自宅での学習環境も十分に確保できません。震災によって、地域の将来を担う世代の教育環境に綻びが生じていると言えます。

しかし一方で、被災を機に、自分の住む地域や自分自身の将来について真剣に考えるようになった子どもも多くいます。日本中からの、そして世界中からの支援は、それまでは遠い存在だった「外の世界」に目を向けるきっかけとなりました。故郷の困難に直面した若い世代は、大人達と同様に、あるいはもっと真剣に、「どうすれば震災を乗り越えられるのか」「どうすれば故郷を復興させられるのか」「自分に何ができるのか」と考え始めています。

このような問題意識を持った子ども達は、復興に向かって歩いていく彼らの町にとって必要不可欠な存在です。長い時間と根気を要する復興には、次世代が担う部分が少なくありません。

震災から約2年以上が経過し、被災地域で求められる支援の形が変化し、多様化している中、私達のような外部団体ができる事、そしてすべき事は何か。世界各地の開発途上国において子ども支援を中心に活動する国際NGOである私達グッドネーバース・ジャパンは、「次世代を担う人材育成支援」という結論に辿り着きました。

自身の故郷の復興について真剣に考える姿勢、自分にできる事を探し実行する力、異なる価値観を受け入れる柔軟性、そして外の世界から学ぶ視野の広さ。このような能力を引き出すため、私達は海外渡航を含む研修プログラムを企画しました。本報告書では、様々な体験を通して、大きく成長した研修生達の姿を皆様にお伝え致します。

2014年2月吉日



プロジェクト概要

1、目的

- ①インドネシア・アチェ州の防災への取り組みや現状の問題点を学び、高校生の視点から日本の取り組み、防災教育を振り返る
- ②故郷の復興を担う次世代リーダーとなる素質を身につける
 - ・広い視野を持って、故郷の復興、発展に寄与する発想や提言を生み出せる力
 - ・率先して行動し、他をまとめ先導する力
- ③交流を通して両国の友好関係と相互理解を促進する
 - ・自分とは異なるバックグラウンド、価値観を持つ人がいることを知る
 - ・他国を見ることで視野を広げ、新しい知見と価値観を手に入れる
 - ・自国や故郷を客観的な視点で見つめ直す
 - ・他者（他国）への敬意と自己（自国）への誇りを養う

2、企画・主催

特定非営利活動法人 グッドネーバース・ジャパン

3、実施

JTB 東北法人営業盛岡支店

4、後援

公益社団法人 青年海外協力協会

5、協力

グッドネーバース・インドネシア ジャカルタ事務所、ムラボ事務所
 公益財団法人 オイスカ、インドネシアOB会研修センター



2004年スマトラ島沖地震について

「同じ大津波を経験したかつての被災地であること。」
 グッドネーバース・ジャパンが、今回の渡航研修の行先をインドネシアにした一番の理由でした。



今から8年前の2004年12月26日現地時間7時58分、インドネシアのスマトラ島沖を震源とするマグニチュード9.1の大地震が発生しました。
 この地震はその後、インドネシアのみならずインド、タイ、スリランカなど多くの近隣国にも被害をもたらす大津波を巻き起こしました。
 死者・行方不明者は合計で23万人近くにのぼります。

TSUNAMI という日本語はいまや世界共通語となっていますが、スマトラ島では「津波」を表す現地語（アチェ語）を大半の人が知らなかったそうです。そのためか、住民自身も地域社会も、また行政も、津波に対する備えや防災策がなく、スマトラ島だけで約16万7000人の犠牲者がでました。

研修全日程 2013年1月～4月

<事前研修>	1月27日(日)	第一回研修会+保護者説明会
	2月23日(土)	第二回研修会
	3月09日(土)	第三回研修会
<インドネシア渡航研修>	3月16日(土)	出国
	17日(日)～19日(火)	バンダ・アチェ
	20日(水)・21日(木)	ムラボ
	23日(土)～25日(月)	スカブミ
	25日(月)・26日(火)	ジャカルタ
	27日(水)	帰国/ベネッセ報告会
<事後研修>	4月6日(土)	振り返り研修
	21日(日)	最終報告会

研修の軌跡



第一部 研修報告

1. 事前研修

2013年1月27日(日)、いよいよ研修がスタートし、インドネシアへ渡航予定の研修生が初めて顔を合わせました。故郷の復興に本気で取り組むために集まった研修生は全員で16名。「同じ岩手県民として内陸に住む私達も沿岸地域の復興について考えたい。」と要望もあり、2名の内陸からの高校生もメンバーに加えました。

事前研修の目的は、3月の渡航に向けて研修生16人全員の絆を深めインドネシア渡航のための知識を蓄える事です。研修生たちが胸に抱いた想いは様々ですが「復興」に対する思いは一つ。第1回、第2回・・・と研修を重ね、渡航日に向けて研修生皆で意欲を高め合いました。

第1回事前研修会

2013年1月27日(日)



ワークショップ①
「インドネシア人に紹介したい岩手・三陸の魅力」
仲間作りワークショップでお互いの事を知った後、「インドネシア人に紹介したい岩手・三陸の魅力」というテーマでアイデアを出し合いました。「海がきれい」「食べ物が美味しい」「人が優しい」等々、沢山のお国自慢が揃いました。特に自分の故郷の海の幸や山の幸について、また環境や地形について魅力を感じている研修生が多い事がわかりました。

ワークショップ②「自分にとっての復興とは？ それを達成するのに必要なことは？」

次に取り組んだのは「復興」をキーワードにしたワーク。インドネシアに行く前にまず自分の、自分達の今現在の意見を整理しておく必要があります。この研修の最大の課題である「復興」を皆で考えました。「仮設住宅に住む人たちがいなくなる」「瓦礫がなくなる」「魚が始まり魚が捕れる様になる」「皆が笑って暮らせる」等の意見が飛び交いました。



第2回事前研修会

2013年2月23日(土)



講義
「インドネシアを知ろう！スマトラ島沖地震を知ろう！」
インドネシアへの渡航前にインドネシア、スマトラ島沖地震の予備知識を身につける講義を行いました。研修生達は特に「宗教」や「言葉」に興味を持っている様で、しおりの余白が講義メモでいっぱいになりました。また、スマトラ島沖地震で発生した津波の映像を見た際、研修生全員が真剣な顔で映像と向かい合っている姿がとても印象的でした。

講義「震災から見たコミュニティづくり」

東日本大震災の復興支援活動を行っているケア・インターナショナルジャパンの玉熊諭(たまくま さとし)氏をお迎えして「コミュニティ」をキーワードに学びました。コミュニティとは何か？コミュニティの再生とは？今回の震災で「支援者」とも繋がりを持った研修生たちは「支援をする側」から見る大震災についても知る事ができました。



第3回事前研修会

2013年3月9日(土)



グループワーク「私達が今伝えたいこと」

インドネシアでの発表準備を行いました。研修生は3つのグループに分かれて現地で発表する際の発表内容について話し合いました。私たちの住む三陸の魅力、東日本大震災の事、自分たちの震災に関する考えをどのように紹介しようかと皆で案を出し合いました。

講義「自分の気持ちを伝えよう！」

クリエイティブディレクターの藤崎実氏をお迎えし、自己表現について学びました。「恥ずかしくて話ができないのなら、恥ずかしくて話ができない、という事を話そう！」「自信なんてなくて良いんだ！」と自分と向き合う術を研修生にお話ししていただきました。



渡航に向けて * - - - - - *



インドネシアの学校で披露するソーラン節の練習を何度も繰り返し行いました。



研修最終日にはオリジナルTシャツも完成。いよいよ渡航研修が迫ってきました！

2. インドネシア渡航研修



2013年3月16日土曜日、2011年の東日本大震災から約2年という節目に私達はインドネシアへ向け出発しました。

出発の日

3月16日(土)

岩手から東京へ



一人一人が大きなスーツケースを持ち、新花巻駅から新幹線に乗り東京駅に向けて出発です。

インドネシア大使館訪問



東京へ到着後、在日インドネシア大使館を訪問。研修生を代表して坂本ロンツェンが「現地の復興の状況を見て、感じて、自分の町の復興に役立つことを考えたい」と抱負を語りました。

成田空港での出発式



成田空港内で行われた出発式には株式会社ベネッセホールディングスの方々も激励に駆けつけてくださいました。研修生を代表して小原伊織が「この研修に対する想いやテーマは別々ですが、私達は一つのチームです。12日間という短い間ですが、日本を代表しているという意識を忘れずに、少しでも多くの事を吸収できるよう真剣に且つ楽しく研修に臨みましょう。」と挨拶。またその後、研修生一人一人がこの研修の目標を発表し、意気込みを述べました。

バンダ・アチェ

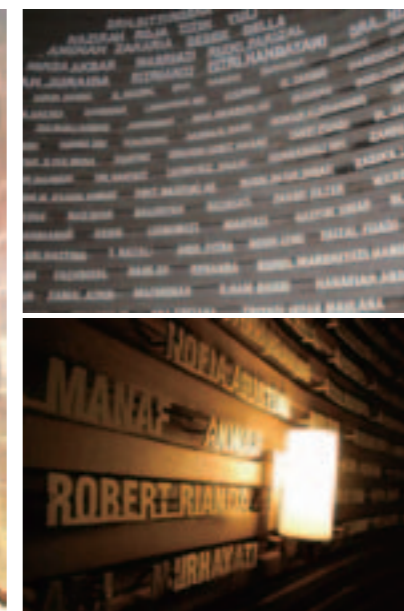
3月17日(日)～19日(火)

日本を後にした研修生達はマレーシアのクアラルンプール空港とインドネシアのメダン空港を経由し、3月17日の夕方、最初の目的地であるバンダ・アチェに到着。ホテルではアチェの民族舞踊で歓迎を受けました。



津波ミュージアム

バンダ・アチェでまず訪れたのは、スマトラ島沖の地震による大津波の記憶を後世に伝える記念博物館「MESIUM TSUNAMI ACEH」。19メートルの津波を体感できる廊下、震災直後の街や遺体の写真が飾られている展示室、当時の津波の映像が流れる映像室等々、研修生は神妙な面持ちで見学していました。



(写真左)

19mの津波を体感できる廊下
暗くて狭い廊下の壁から水が流れていて水しぶきが体に当たります。当時の被災者がどのような恐怖を感じたのか、追体験できるブースになっていました。

(写真右、上下共に)

祈りの部屋

コーランが響く祈りの部屋。津波で亡くなったうちの2006名の名前が刻まれています。犠牲者が安心して天国へ行けるようにという願いが込められています。